

昨年12月22日。中央大学ラグビー部は41年ぶりの大学選手権ベスト4を懸け、強豪・早稲田大学に挑んだ。迫り来る赤黒のジャージーに遮る二食らいつくも、憧れの国立競技場の舞台は夢と消えた。「おまえら出し切っただろ。社会に出れば理不尽なことがばっかり。今後の人生も胸を張って歩いて行け」。試合後、肩を組んだ円陣で、いつも強気な監督、松田雄(40)の目にうっすらと涙が光った。

監督就任4年目の今季。関東大学リーグ戦で中央大を2位に躍進させた松田だが、自身が歩んだラグビー人生は決して平たんではなかった。「大きなやつに負けたくない。絶対にタックルだけの思いは強かった」中央大時代は豪快な突進でならしたが、身長183センチは社会人ラグビーのロククとして小柄な部類。リ

## 名将にみる マネジメント術

### 中央大学ラグビー部 松田 雄監督



「ここぞの場面で120%の力を出し、終わったらあおむけでぶっ倒れよう」と熱い思いを語る

# 情熱の色、赤だけじゃない

コー入社後、10年を超える現役生活はケガとの戦いだった。2005年の大みそかの練習試合で眼窩(がんか)底を骨折。その時32歳で、引退も頭をよぎったが、浮かんた思いがこの人らしい

コー入社後、10年を超えて鳴を上げ、1年間で肋骨や指など8回、骨折した。「もう手で行っている。おなかいっぱい。やり切った」07年に現役を引退し、リコー社員として働きのながら、ラグビー部をサポート

する日々。実直な松田の人柄を象徴する出来事があった。強化で招いたプロの外国人コーチが「チームのため」を建前に保身に走る姿が許せなかった。「人のために役に立つ。日本は自己犠牲と感謝の文化なんだ。あなたに違ふ」。ミーティングのたびに外国人コーチと激しくやり合った。自分からこそ、周囲の大人や学生にその気持ちを通じる。

そんな折、中央大監督就任の話が飛び込んできた。指導者とは一線を画す。

当時の私生活で転機を迎えており、悩む松田の背中を押ししたのは家族の一言だった。「自分のくだらないこと思っていた」。松田の世代は試合前、極限まで精神を集中し、時には涙を流してグラウンドに飛び出すのが主流。今は音楽を聴いてリラックスイし、試合で力を発揮する選手もいる。「白や黄色の炎があることがよく分かった」。選手個々に応じた指導に力点を置く。

松田は目標にする指導者人間はいろいろな。仲間のためにここぞの場面で120%の力を出し、終わったらあおむけでぶっ倒れよう」。仲間との最高の瞬間を選手に味わせたいと、松田は仕事、監督の二足のわらじで奮闘し続けた。が、ラグビーの神様はそんなに甘くはなかった。

自身の経験を語り押しする(阿部将樹)